

遠隔授業で作る、遠隔授業の見方動画

—— 3 回生ゼミで幼児、児童を対象として ——

池 田 修

はじめに

本実践論文は、遠隔授業時の動画作成の記録と考察である。2020年度、突然の遠隔授業決定に際し、この遠隔で授業を行うという制約を生かし、教育演習 1（以下、三回生ゼミ）の学生たちに遠隔授業ならではの学習内容の理解、スキルの獲得、キャリア形成を手に入れさせることはできないかと考えて行った実践の記録である。

前期15回の授業のうち、実質的にそのうちの 5 回を使って行った。完成した動画は、「【幼児・児童向け】 おうち時間に、つなぐたちばなエールー適切な動画の見方、遠隔授業の受け方ー」として本学のホームページに掲載された。（図 1）



大学の取り組みについて

【幼児・児童向け】 おうち時間に、つなぐたちばなエールー適切な動画の見方、遠隔授業の受け方ー

本学発達教育学部児童教育学科・池田修教授ゼミ3回生が、「幼児、児童に適切な見方や学習の仕方ができるように」という思いで、遠隔授業を受けている自分たちの経験をいかながら、幼児や児童向けに動画を制作しました。動画の内容は、おうちで過ごす時間や遠隔授業を受ける機会が多くなる中で、『適切な動画の見方（動画をみるときのお約束）』と『遠隔授業の受け方』を伝えるというものです。学生たちは、著作権、人権への配慮、幼児・児童に関する学習、メディアリテラシー、プレゼンテーションに関する学習を行い、サンプル動画の作成や議論を繰り返しながら、動画を完成させました。

おうち時間をより楽しく過ごせるよう、池田ゼミの学生たちが制作した動画をお届けします。ぜひご活用ください。

【幼児向け】 適切な動画の見方（動画をみるときのお約束）



※幼児の動画の視聴については、視聴を勧めているわけではありません。「もし見るのであれば、このようにして見てください」というための動画です。

図 1 京都橘大学 HP 遠隔授業の受け方

以下、シラバスの記述、対象学生、目的、方法、授業の流れを示す。

はじめに、シラバスである。本授業のテーマ、授業の到達目標、授業の概要について、以下のように示してある。(表1)

表1 教育演習1シラバスの一部

テーマ	国語科の授業づくりと学級づくりに関する基本文献に学ぶ。国語科の学習材開発に取り組む。
授業の到達目標	国語科の授業づくりと学級づくりに関する基本文献、または幼児や児童のことばに関する認識を育てる保育実践や教育実践の記録を読み、各自が関心のあるテーマを探し出す。テーマにそって調査したことを報告し、質疑・応答・討議を重ねながら、問題意識を深める。また、国語科の学習材開発を行い、オリジナルの学習材開発に挑む。
授業の概要	幼児や児童ことばの形成にかかわる教育実践上の課題と、学級づくりに関する実践上の課題をつかむために、ことばの発達と教育に関する基本文献、学級づくりのための基本文献を読み進める。その中で、自分の研究課題を見つけ出し、研究課題を深める資料を収集し、わかったことをまとめて発表する。受講生の学ばうとする領域の分布、または関心によって授業の進め方は調整することがある。また、学外授業やゼミ合宿を、適宜、行うことがある。

この三点に基づき、遠隔授業でできることを考えた上で、「オリジナルの学習材開発に挑む」に焦点を当てて実践した。

つぎに、対象学生、目的、方法、授業の流れを示す。

対象学生：発達教育学部児童教育学科三回生14名、四回生1名。そのうち児童教育コース所属10名、幼児教育コース所属5名。

例年、本ゼミは小学校教諭を目指す児童教育コースの学生が配属されることが多い。ところが、本年度は幼児教育コースの学生が5人配属された。ダイバーシティが学びにいい影響を与えてくれることは十分に考えられる。幼児教育コースの学生たちを歓迎した。そして、この構成が学生たちの学びにいい影響を与え合うことができるゼミ運営を考えることが、ポイントだと考えた。

目的：以下の四つとした。

1. 学生たちに、作って学ぶを体験させる
2. 学生たちに、ピンチはチャンスだを実感させる
3. 学生たちの、ICT 活用能力を高める
4. 学生たちに、教材作りを通して、授業づくりの一端を体験させる。

以下、四つの目的の説明に当たることを示す。

1. 授業者の研究テーマの一つに「作って学ぶ」がある⁽¹⁾。これはアメリカの形成外科たちが授業方法の一つとして使っている、See one, Do one, Teach one を基本にしている。

The traditional teaching method of “see one, do one, teach one” in surgical residency programs is simple but still applicable⁽²⁾.

つまり、見て学ぶ、やって学ぶ、教えて学ぶである。授業者は、この周辺やこの先に、Make one、作って学ぶがあると考えている。作りながら考える、作ることで考える。教材を作りながら授業を学ぶ。授業を作りながら授業を学ぶがあると考えている。

実践を重ねてきた⁽³⁾作って学ぶ授業では、以下のことが言えると考えている。

- 1) 正解が一つに定まらない探究型の学習。
- 2) 「授業内見学者」が、いない学習。
- 3) 議論を重ねて、バージョンアップしていく学習。
- 4) 知識が必要になってしまう学習。

これは、平成29年度版の学習指導要領で求められている「主体的・対話的で、深い学び」にもつながっているものと考えられる。

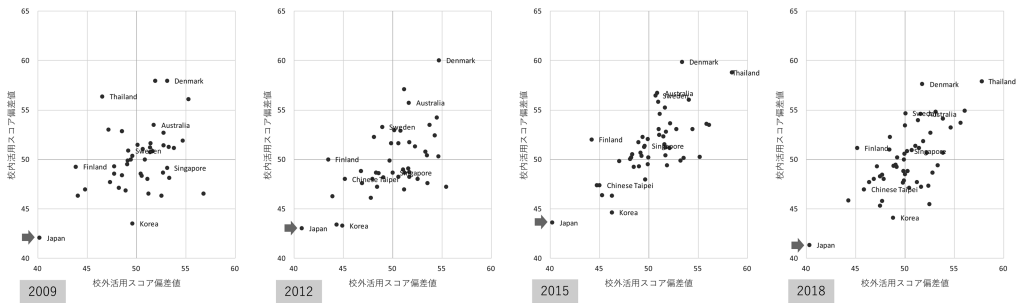
2. 本学は、2020年度の前期の授業は最初に遠隔授業を行い、5月12日から対面授業の一部再開ということが総務部の新型コロナウイルス対策本部から方針として示された。しかし、状況の変化により4月22日には前期の授業は基本的に全て遠隔授業と決定された。また、対面授業は一部申請により6月8日より再開した。その中で、本授業では全て遠隔授業で行なった。

授業者は、授業づくりを研究対象としている。遠隔授業は近い将来議論されるものであるという認識はあったが、実際に行ったことはない。また、臨床的に授業で行おうとしても様々な制約もありやりにくいと考えていた。そこに遠隔授業が実施可能な条件になってしまった。これは、授業づくりを研究する者にとっては、チャンスである。この機会に一から学べる。

そして、その姿を学生たちに示し、学生たちをも遠隔授業の担い手にすることができる機会になりうるのではないかと考えた。実践者は、ことわざの再現「急がば回れ」⁽⁴⁾などもしている。ピンチは、チャンス。これも一つのことわざの再現である。

ピンチとは、条件の急激な変更のことを指す。この急激な条件の変更を生かすことができれば、今まででは不可能だったことが可能になる。これがピンチはチャンスだの正体ではないかと仮説を立て、学生たちと実証することを考えた。

3. ICTの活用となると、文章を書かせる、またはパワーポイントで発表させるということがイメージされてしまうことが多い。ICTの活用とは、電子文房具を使って学びを進めていくことなのだということが理解されにくい。我が国の情報活用状況について豊福(2020)は、OECDの実施するPISA2018年の調査を分析し、校内外学習活用は日本は最低のランクにいると指摘する⁽⁵⁾。(図2)



項目回答値（1～5で頻度を表わす）の単純合計値平均の偏差値を国別に求めた。調査年によって項目構成は若干異なる。
CC-BY-4.0 Shimpei Toyofuku / OECD-PISA Database <https://www.oecd.org/pisa/data/>

図2 PISA2009～2018 IC010・011 校内外学習活用偏差値の推移

その一方で、2020年は、小・中学生に一人一台のパソコンを与える GIGA スクールが始まる⁽⁶⁾。

言葉を選ばずに言えば、今までは学校に一人一台のパソコンがなかったから子供達に指導することができなかったと言え言えた。しかし、これからはそれは通用しない。また、この学生たちは遠隔授業一期生であるが、卒業して教育の現場に立つ時、種々のデバイスを駆使し授業を作れる先生に、また、遠隔授業ができる先生に育てておきたい。それならば、このピンチを生かすのが良いと考えられた。

幸いにして、学生たちは、最低スマートフォンは持っている。また、本学は、「新型コロナウイルスによって学ぶ意欲があるにも関わらず大学を辞めざるを得ない学生は一人も出さない」という方針の下、ルーターやパソコンの無料貸し出しを学生たちに行った。このことで安心して、遠隔授業を実施する環境も整えることができた。

ICT の活用は、今ある問題点を楽々と解決する。しかし、スマホしかいじったことのない学生にはそのハードルは高い。特に心理的なハードルが高い。しかし、使ってみれば何でもないのである。学生たちが使っている iPhone にはほとんど説明書はないのである。どんどんやらせていくことを考えた。

4. 授業は様々な要素から成り立っている。藤岡信勝は授業の4レベルとして、「教育内容」「教材」「教授行為」「学習者」⁽⁷⁾を挙げている。そこにある営みが授業であるならば、この4つがあっていい。この4つを有機的に関係させながら授業づくりを考えさせることは大事である。しかし、それはとても複雑な学習になる。

ここでは、この中の「教材」を、動画を作ることを通して、授業づくりの一端を体験させたいと考えた。

方法：遠隔授業は、テレビ会議システムの zoom を活用した。学生たちは自宅で自分のデバイスを使って授業を受けた。デバイスは、スマホ、タブレット、PC と様々であったが、デバイスの違いによる問題になる大きな影響等はなかったと考えている。

授業の流れは以下の通りである。

表2 前期三回生ゼミの流れ

回	日付	内容	期
1	4/13	自己紹介	第1期
2	4/20	遠隔授業を受ける時に困っていること	
3	4/27	学習ゲーム「たほいや」をやる	
4	5/11	次週から、動画の作成を予告	
5	5/18	15分で全員を YouTuber にする、チーム分け、 β 版作成を指示	第2期
6	5/25	β 版を見て考える	
7	6/1	Ver.1 版を見て考える	
8	6/8	Ver.2 版を見て考える	
9	6/15	完成版チェック、次の課題の間違い探し、漢字学習ゲーム作りの提示	第3期
10	6/22	次の課題の間違い探し、漢字学習ゲーム作りの β 版チェック	
11	6/29	3回生合同ゼミ 進路学習ガイダンス	
12	7/6	メイキングの文章のチェック、間違い探しブラッシュアップ	
13	7/13	動画作成を振り返る	第4期
14	7/20	オンラインでの遊び、授業の可能性を考える	
15	7/27	前期のゼミを振り返る	

授業の記録

授業は、大きく4つの期に分かれて行った。中心となるのは、準備のための第1期と、実際に作り込んで完成させる第2期である。ここを中心に記録する。

第1期

第1期は、以下の二つが目標である。1. 授業者と学生、学生同士の関係づくり。2. 授業者、学習者が遠隔授業に慣れるである。突然遠隔授業になったため、学生はもとより、授業者も遠隔授業についての進め方についての知見はない。慣れる必要がある。

2週間は遠隔授業で行うという大学の方針があったが、4週間になり、前期一杯が遠隔授業となったので、遠隔授業の仕方、受け方に慣れる時間を多めに取った。また、授業者が遠隔授業を勉強する時間が、どうしても欲しかった。どのスタイルで遠隔授業を進めるのか、どんなシステムを使うのか、遠隔授業でのトラブル対応はどうするのかなどである。

元々、遠隔授業の種類には大きく分けて、2種類あると言える。即ち、オンデマンド型(教材提供型)授業と、同時双方向型授業である⁽⁸⁾。前者は、授業の動画や教材を配布して学習者が自分のタイミングで授業を受けることができる他、インターネットのデータ量が少なく済む。

その一方で、学生が課題を後回しにしたり、質問がしにくいなどの弱点がある。後者は、決まった時間にリアルタイムで授業を行う。通常の対面授業に近い。全員が教室の最前列に座っているようなものであり、かつ、隣が居ないので私語は発生しない、細かいところは拡大してみることができるなどいい。しかし、データ量が多くなるのは弱点である。

両者を比べ、通信各社の大学生のデータ無料枠拡大⁽⁹⁾、本学のルーター、パソコンの無料貸し出しの状況を踏まえた上で、授業者は同時双方向型授業を選ぶことにした。

最後に遠隔授業のシステムは何を選ぶのかを考えた。本学では Teams を正式にサポートしていた。そのことから、Teams も考えた。しかし、最終的には zoom を選ぶことにした。理由としては、

1. 事前の学生の登録が不要
2. 音質がいい
3. 大学が公式サポートを始めた

である。zoom では、学生たちには、授業に使うリンクを知らせるだけで始められる。また、授業者は耳に障害を抱えているため、スピーカーから流れてくる音質の違いは大きかった。

また、この第1期の様子は、授業者が実際に行ったことをもとに、『zoom で始める遠隔(オンライン)授業』として、note と Apple Books から電子出版として上梓した⁽¹⁰⁾。

学生たちは、前年度の最後のゼミ発表の時に、一度だけ顔を合わせている。それ以外は、今まで授業で一緒になったことがあるかどうかという程度である。交流を深めさせるために、オンライン上で会話をする時間を作った。

4/27のある学生の感想には

毎回、授業の初めにみんなの一週間の過ごし方について聞いていく中で、自分には思いつかなかったようなアイデアでこの自粛期間を過ごしていることを知ることができる。例えば、オンライン映画観賞会を開催したり、妹のオンラインバレエレッスンの為に家族で工夫していたり、今まで見たことのない映画や漫画を知ることができる。その話を聞きながら自分の生活に置き換えて考えてみたり、自分もしてみようと調べたりすることで有意義な自粛期間を作ることができると感じる。

また、自分が行っていることをみんなに伝えることで、生活の中でみんなに紹介できそうなことを探す楽しみが増える。お互いの生活について情報交換をすることで相乗効果でそれぞれの生活が豊かになっていくのではないかと感じる。

多くの学生たちにとって、スマホを使うとすれば、感想文の課題をやることはあっても、日常は、写真、LINE、Instagram である。この学生たちに、ゼミ内の交流を行い、zoom での授業の受け方を教え、慣れさせる。また、出席管理、課題提出と管理のために Google classroom も教えることにしたため、時間をかけた。

結論から言えば、zoomで授業を受けるだけであれば、さほど難しいことはないと思われた。Google classroomも受講者の側の機能はさほど多くはないと見て取れた。

3回目には「たはいや」という辞書を使った言葉遊びの学習ゲームを行なった。zoomにあるブレイクアウトルームを使ってみる、交流を深めるということでやった。これも大きな問題はなく行えた。対面の授業で行う「たはいや」が、オンラインでも全く問題なくできていることに、授業者はこれから授業に希望を見出したのを強く覚えている。

第2期

第2期は、授業者が授業後にした日記の授業記録を元に記す。やや口語が混じっているのは、そのためと理解されたい。

5/11

近況報告をしあうことは続けている。小中学校においても、双方向型の遠隔授業を行なっているところはある。しかし、いろいろな話を聞いているが「授業」ばかりである。休み時間がない。遠隔休み時間がない。児童生徒は、授業を受けたくて学校に行っているわけではない。仲間と会いたいからである。そのための時間がない。

それが大学生も同じ。なんとなくでも同じゼミのメンバーの様子を聞いているということが大事なのだ。そういう人間関係があってこそ、共同学習が進められるのだ。

遠隔授業では私語が起きない。画面には学生たちがみんな写っているのでうっかりしたが、学生たちの横には基本的に誰もいないのだ。だから、私語は起きない。授業に集中する。ところが、隣に仲間がいないので、ちょっとしたことの確認もできないのだ。これがかなりストレスになっていることを学生たちから聞いた。そこで、

通常の授業では許されないが、LINEとzoomのプライベートチャットを活用せよと指示を出した。学生たちはびっくりしていた。対面授業で授業中にLINEを使っていたら、怒られてあたりまえであるからである。しかし、ここはオンライン授業である。対面とは違う。違うならば、ルールも違ってしかるべきである。

「テストと違って、ここは性善説を取る。君たちは、授業に関係のあることでLINEやプライベートチャットすると信じる。ま、私の授業を受けながら、それをやるのは通常以上に大変だとは思うけど(^^)」

と言って、勧めた。

対面授業で行われている授業受けるためのルールと、遠隔授業を受けるためのルールは違うはずだ。目的と状況が違えば、ルールは違う。ここを学生たちと一緒に考えていくことも大事なレッスンだと考えている。

ゼミ生たちには、ゼミ内で課題についての大きな説明をした。児童教育コースの学生には、漢字の学習カードの作成と小学生へのオンライン授業の受け方の動画の作成。幼児教育コースの学生には、ひらがなの学習カードの作成と YouTube の動画の見方の動画作成。これを第一案として示した。ここまでの感触でこのゼミ生たちはできると判断した私はこの課題を行うことにした。

その後、ゼミ内で意見を交換し、ひらがな学習、漢字学習のさせ方は、動画を作ってまだ余裕があれば行うということにした。二つの課題を同時にやるのは避けることにした。

また、特に幼児教育コースの学生たちには、今回作る YouTube の動画の見方の動画作成は、幼児に YouTube を見ることをお勧めするのではなく、もし見るとしたら、こういう見方をお勧めしますというスタンスで作ることを指示した。

5/18 15分で全員を YouTuber にする、チーム分け、β版作成を指示

この日の授業では、3回生ゼミ生全員を YouTuber にした。遠隔授業が当たり前になっていく時代に教師になろうとする学生たち。その彼らを YouTuber にした。

「今日は、皆さんに YouTuber になってもらいます。ちなみに、今まで YouTube に自分の動画をアップロードしたことある人は？」

と聞く。予想はしていたが、0人であった。誰もしたことがない。彼らにとって YouTube は、情報を受け取ったり消費するところであって、発信し生産するところにはなっていない。遠隔授業の一つとして、YouTube を使うというのは大いにある。しかし、大学3回生が一回もアップロードしたことがないというのは、本当に危ない。そのまま現場に出たら、ネット関係の指導なんてできるわけがない。遠隔授業なんてさらに無理だ。

また、動画を作成する前に、簡単な動画をアップロードして YouTuber になれさせた方が、気持ちもいい。いわゆるテンションが上がるである。

「では、これから15分以内に皆さん、全員 YouTuber になってもらいます」

「ええええ」

と驚きの声。

そうだろう。彼らにとってはかなりハードルが高く思えるだろう。しかし、全員 Gmail は持っているし、Chrome はインストールしてあるし、スマホも持っている。何も問題はない。

私の Mac の画面を zoom で共有し、YouTube から動画をアップロードする手順を見せる。そして、注意点を一つだけ伝える。それは、限定公開にせよというものである。YouTube には、公開、限定公開、非公開(自分だけ)の三つの方法でアップロードできる。レッスンなので、ここは限定公開にする。これなら、学生たちの動画に問題があったとしても、世の中に伝わることはない。

指示は、以下の通り。

1. zoom のビデオを消して、5 秒程度の動画を撮る。または、自分のスマホから探す。
2. YouTube に限定公開する。
3. 完成したらビデオをつけて、チャットに動画の URL を貼る。

これだけである。

最初の説明に 5 分、動画を撮影して、YouTube にアップロードするのに10分。実に見事に、10分以内に、全員が YouTuber になった。

学生たちの動画の例である。

https://www.youtube.com/watch?v=I_Jc4wYGq0g&feature=youtu.be

最初に見たのがこれで、いきなり度肝を抜かれた。

私は全く知らなかったのだが、若者の間では、これが流行っているらしい。自分に似たアバターを作って、それを動かすためのアプリがある。私は絵柄がダメなので、自分で再現はしなかったが、これは動く着せ替え人形だなあと唸った次第。



<https://www.youtube.com/watch?v=OCI-Ri-PBls&feature=youtu.be>

これもなかなか良かった。

単にペンギンの消しゴムを撮影しているだけなのだが、なんともいい。こんな短時間で動画を撮ってエフェクトを掛けてくるなんて、びっくりして「何か編集のソフトを使ったの？」

と聞いたら、YouTube にあるという。知らなかった。



「いやあ、すごい。素晴らしい！」

と褒める。

「ただね」

と話を続ける。

「残念ながら、多くの学校ではそうならんだろうなあと思う。『先生の指示通りになんでやらなかったの?!』と怒られるだろうなあと思うんだよね。『勝手に効果をつけないの!』とかね。でも、やりたいよね、子供なら。やらせてあげればいいと思うんだよ。

法律違反ではなく、倫理違反ではなく、生命に危険が及ばないものであれば、どんどんやらせればいいというのが、私の考え。

『想像して創造する』のは、君たちに話した1985年のユネスコの学習権宣言にもある言葉だ。そしてブルームの認知過程の次元の最上位にあるのは創造だし、H29年度からの学習指導要領もこの流れを受けている。だから、そういう子供は褒める対象であって、叱る対象ではないのだよ。大いに褒めてあげれば良い」

など話す。

次週までの課題として、

1. 分かれたグループで Googlemeet を使って話し合いをする。
 2. 与えられたテーマに基づいて 1 分程度の動画作品の β 版を作っておく。
- ということとした。

たったの15分で YouTuber になれる。そして、最初から工夫しようとしている。

すごいことだ。これならば、ある程度クオリティの高い作品が作れるのではないだろうか。彼ら彼女らの作品に期待したい。

一人のゼミ生の感想である。

今回の授業では、同じゼミのメンバー全員が初めて YouTube に動画を投稿した。今まで、動画を投稿する、というと物凄く難しいものに感じ、自分には縁のないものだと思っていたが、なんの編集もしていない5秒の動画を投稿をするというのはとても簡単であった。このように、実際に使ってみる前から、難しそうだから、と決めつけて今まで避けてしまっていたコンテンツは数多く、現在授業で当たり前のようになっている Zoom も、このような理由から初めて使うとなったときはとても億劫に感じていた。これからはこのような偏見をなくし、新しいものを実際にどんどんと試してみることでより良いものを発見していきたいと思った。

学生の意欲が動き出したのがわかる。

5/25 β 版を見て考える

「遠隔授業の3回生ゼミ。すんごく良かった。割と感動している。昼ごはんが2割り増しで美味しい！」とまあ、授業を終えたあと、Twitterにこんな風を書いてしまった。

いやあ、私の要求水準が低いのかなあ(^^)。それで感動しているのかなあと思いもしたが、でもまあ、なかなか感動したのが今日の学生たちの作品。

学生たちには、先週全員に YouTuber になってもらった。ものの10分で5秒の動画を撮影して、その後 YouTube にアップさせた。実にあっけなく YouTuber の誕生ということで、彼らはとても驚いていた。しかし、今日は私が驚き返しをされてしまった(^^)。

私が彼らに与えた課題は、次のもの。

1. 小学生に適切に快適に遠隔授業を受けるためのご紹介ビデオを作る。
2. 幼児に適切に快適に YouTube を見るためのご紹介ビデオを作る。

である。

このゼミには、将来小学校の先生を目指す学生と、幼稚園や保育園の先生を目指す学生がいるからだ。

小学生は、1、2年生、3、4年生、5、6年生の3つのチームに分けた。また、入学前の幼児は、3歳児と5歳児に分けた。それぞれの幼児、児童に向けて目的にあった動画の β 版を作成してくるよという指示。 β 版なので、導入だけでもいいとはしていた。完成版は3分のもをを目指しているが、今回は1分程度の β 版を作ってくることを指示した。そしたら、まあ、なかなかいい5本が揃ったのだ。

こういう予め正解が設定できない課題を出すとき、私は次の三点プラスアルファを指示する。

1. 目的を示す
2. 目標を示す
3. やってはいけないことを示す

である。

1. これは幼児、児童に適切に快適に YouTube の鑑賞、遠隔授業の受け方のビデオを作る。
2. 3分以内で見終わり、かつ、1.の目的が達成できる公開できる YouTube の動画を作る。
3. 情報の剽窃、個人情報の流出、著作権の侵害、基本的人権の侵害などである。当たり前のことではあるが、大事。学生たちに思い切って制作させたいがダメなことは何かを伝えておくことでやりやすくなる。指導者の側からすれば、これはリスク管理ということになる。

これだけの条件で、

「さ、あとは頑張ってね」

とリリースする。

私の経験上ではあるが、細々と指示するよりは、よほどいいものができる。

また、プラスアルファは、

「私が想像している出来栄えを、軽々と超えてね(^^)」

である。このプラスアルファは、結構いいと思う。軽いプレッシャーになるからだ。

実際はどうだったのか。

β版ではあるが、学生たちには許可を取って、私の SNS 関連で公開しました⁽¹¹⁾。

どれもオススメです、1、2年生に向けてと、3歳児さんに向けて、5歳児さんに向けては本当にびっくりしました。3歳児さんに向けて、5歳児さんに向けてのアニメーションのキャラクターはオリジナルだそうです。3歳児さんに向けては3時間ぐらいで完成したとのことです。びっくり。

(1) 1、2年生に向けて

https://youtu.be/OmtTHEG_z5o

(2) 3、4年生に向けて

https://www.youtube.com/watch?v=99F5qK-1_9A&feature=share

(3) 5、6年生に向けて

<https://m.youtube.com/watch?v=3cG9WllULz0>

(4) 3歳児さんに向けて

<https://youtu.be/TIvIY1VFVPo>

(5) 5歳児さんに向けて

https://youtu.be/_f8oR6jUHCc



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)

授業では、この YouTube の動画を zoom で鑑賞。その後、それぞれの制作者たちから自評をしてもらって、ゼミで意見をもらい、私がコメントという形で行いました。
やっぱり作ってみないと分からないことが多いし、作ってみればよく分かることがあるという
当たり前の感想を共通して得られたのが、とにかく嬉しかったですねえ。

これで β 版を作り終えたので、次回の ver.1 に向けて共通して指示を出しました。それは、構成が弱いということ。例えば、目的が示されていない。また、準備と授業中の 2 つの内容になっているのに、その説明が最初にない。

「この動画は、適切に快適に遠隔授業を受けるために作りました。そのために、2 つのことを説明してあります。1 つは、準備の仕方。もう 1 つは、授業中の受け方です。このようなリードの部分がない。これがあるとないとでは、聴きやすさが全く違う。構成を確認し、視聴者の子供達の視点から、ビデオをより良いものに作り上げてください」

これが今日の私の話のメイン。

ま、来週、さらに私を驚かせてくれるだろう。

教師の仕事の一番嬉しい仕事は、学生たちの作品に驚くこと。

評価の言葉の最上位は、彼らの学びに驚くこと。

私はそう思っている。

先週初めて YouTuber になったんだよな？

この学生たちは(^^)。嬉しいなあ。

やっぱり、遠隔授業は、学習者が ICT 機器を使って作って発表するのがいいなあと思う。

ある学生の感想である。

学年ごとに特徴があってどの動画もクオリティが高く、とても面白かった。特に幼児さんのグループの動画は、1 年違う授業を受けていてあまり関わることはなかったのも関係していると思うが、面白い発想で動画を作っていてとても驚いた。そして、児童のグループとは違ってなるべく情報量を少なめに、楽しく動画を見るということを重点的に動画を作っているのかなと思った。私のグループは幼児と児童の間のような、低学年向けの動画を目指して作っているの、幼児さんの動画はとても参考になった。また、私たちのグループもそうだが、他のグループの動画を見て、離れていても同じ目的目標を持って動画作りをすることは可能であることを実感した。

そして、池田先生はどのグループの動画にも反応がとてよくて、発表がしやすい雰囲気を持って行ってくださっていたなと感じた。良いところは伸ばし、あともう一步のところは改善策を提示し、と私たちの課題に対する向上心を刺激するような指導をされていたように思う。また発想を練って良いものを作り上げられるように頑張りたい。

もう一名

今日の授業を受けて、YouTube 動画も、他の課題でも、課題を受け取った時の先生の反応はとても大切だと思った。(中略)私たちのグループは、キャラクターを中心として動画をつくった。自分たちのグループの時、見ていただくことに、とてもドキドキした。そして見終わったあと、いい反応をくださった。このいい反応こそが、また課題を(ママ)達成感を感じたし、次はどんな方法で先生を驚かせようかなという思うきっかけになったと思う。仮に授業内容は別にあって課題の改善点を文字のみで伝えられたら、頑張っても注意ばかりされたと、やる気は低下し、課題は出せばいいと思っていたかもしれない。

さらにもう一名

池田先生の反応もとても見応えのあるものだった。それぞれのグループに対してすべて違う反応を見せており、まず作品を褒める、その後に耳が聞こえない子どものために字幕を付ける、声は明るくゆっくりと端的に話すなど適切なアドバイスという順をどのグループにもしていた。

私たち学生からすれば、褒められて嫌になることはないし、向上心が一番上がるのは褒められた時だと思う。私もその一人である。「褒める」という行動が何よりも大切なだろう。そして、その後にしっかりフィードバックする事が有効な方法だと考える。

ゼミ生の発表だけでなく、発表をファシリテートする授業者の観察も行われている。教職課程の授業は、授業をしながら授業の作り方を見せている一面もある。遠隔授業でもそれを意識する学生たちは生まれてきている。

別の観点からもう一人

(前略)この動画に対するみんなのコメントは参考になるものばかりで、様々な気づきがあった。

例えば、耳の聞こえない子に対しての配慮としてナレーションなどに字幕をつけるという

ことだ。今回私はみんなの動画を見ていて、字幕がついていなくても何も思わなかった。つまり、自分の視点からしか動画を見ることができていなかったということである。これ以外にも次の動画作りに生かそうと思う気づきがいくつかあった。

今回の耳の聞こえない子に対する配慮についての考えから、これからは自分自身の1つの視点からだけではなく複数の視点から物事を見たり、考えられる力を身につけたいと思った。これは人と関わる職に就くには、必ず役に立つし必要な力だと思うので今の学生の内から身につけたいと思う。そして、様々なことに気がつき、配慮ができる大人になりたい。

β 版を作ったことにより、仲間の作品を製作者側かの観点から見るができているのがわかる。自分が作る際に気がつかなかった点を見つけている。

6 / 1 Ver.1 版を見て考える

この日は、遠隔授業の受け方、YouTube の見方の動画作りの2回目であった。
先週の指摘をもとに作り込んでくると思われる。私は、楽しみにこの授業を待った。

私は、facebook に動画をあげて、この間、いろいろな方からコメントをいただいた。嬉しいことだ。そこで学生たちはどうしたのかを確認した。

「この一週間で、誰かに見てもらった人は？」

と確認すると、一人だけ母親に見てもらったという学生がいた。

自粛生活をしている中では仕方がないことかもしれない。しかし、リンクを送れば見てもらえるわけだからしない手はない。

「何かを作るっていうのは、実にいろいろなことを学びます。今回、君たちはこんなものを作ろうとして、頭の中にあるでしょう。ところが、作品になるとその頭の中のものとズレる。さらに、それを見てもらいたい人に見てもらおうと、見る人の頭の中でまたズレる。そういうものなのです。

これは授業を作るときも同じ。やりたかったことと、やれたことはいろいろなことがあって、ズレます。このズレを少なくするために準備をし、また授業中に調整をしながら進めていきます。

今回の動画作りもまさにその繰り返しになるでしょう」

「では、そのズレを少なくするためにはどうしたらいいでしょうか。これは伝える側の技術を高めることと、伝わったものがなんだったのかのフィードバックをもらうという2つの方法で考える必要があります。

前者に関しては、私が指導できます。伝えたいものを伝えるための技術は教えられます。しかし、それが伝わったのかどうかは、また別。だから、見てもらう必要があります。可能ならば、対象の子供達に。ただ、実際は今回は厳しい。やれてもたまたま親族にいるぐらいではないかと思います。ただ、大学の専門の先生に見てもらうことはできるはずです」

などと話す。

その後、Facebookなどでいただいたメッセージを学生たちに紹介する。ありがたいことです。学生たちはとても嬉しそうだった。

だが、前回指導したはずなのだが、うまく伝えられていなかったことがこの動画を見てわかったものもある。それはナンバリングである。

話し言葉は、書き言葉と違って、話全体の構成は最後まで聞かないとわからないことが普通である。書き言葉なら、全体の量とか目次などでわかる。しかし、話し言葉はこれがない。だから、

(一体この話はいつ終わるのだろうか?)

と聞き手が不安になる。

そこでナンバリングである。

正しいナンバリングは、

1. 全体に幾つのトピックがあるかを示す。
2. 今いくつめのトピックを話しているのかを示す。
3. 全部で幾つのトピックを話したのかを示す。

この3つが揃って、ナンバリングなのだが、これが中途半端なままの動画が多かった。ここは指摘。

また、このナンバリングと同時に大事なのが、ラベリング。つまり小見出しをつけることだ。説明は、最初に端的に10文字ぐらいで行って、その後詳しくする。これを逆にすると、聞いている側はなんだか分からないことになる。

話す側は、親切心で最初から丁寧に説明する人もいるのだが、これはご法度なのである。ナンバリングとラベリングがしっかりしている話は聞きやすいし、この動画でも見やすくなる。これを修正して、かつ、誰かに見てもらってフィードバックを受けて、完成品にすることを求めた。

この動画は、学修の一環なので、最後には参考にした資料の一覧も載せる予定だ。思いつきだけでなく、思いつきを資料に当たって作ったものということを示したい。

また、この動画を作るときのメイキングとして、制作過程を文章で残し、最後は、電子ブックにまとめることをしたいと話す。そこまで出来れば、かなり多くのことを学ぶことができるはずだ。「作って学ぶ」ことになるはずだ。

そして、これが終わったら、保護者編を作る。つまり、子供向けのものに注釈を入れるような動画を作る。教師の仕事は子供相手だけではない。子供、保護者、職員室の同僚。最低この三者とのコミュニケーションを取る必要がある。

最初に子供編を作ったので、この後保護者とのコミュニケーションを図るための保護者編を作る予定。ここまで完成したら、前期は終わっているのではないかと思われる。

遠隔授業一期生としては、なかなかいい感じになるんじゃないかなと思っている⁽¹²⁾。

以下は、 β 版から ver.1 にして来たものです。

最初に、幼児さんへの動画

(1) <https://youtu.be/w-wrGWP-orU>

(2) <https://youtu.be/mPeW8tPsF5w>



(1)



(2)

次は、小学校の児童に向けたものです⁽¹³⁾。

(3) <https://youtu.be/KMSwIgbAxlC>

(4) <https://youtu.be/R6DzluznmfQ>



(3)



(4)

学生の感想から

今回の授業で印象的だったのは、オンライン授業のための動画を見る前に池田先生がおっしゃった【表現する際に誤解があるように伝わった場合は、伝える側に責任がある】ということです。

これはわたしはまだ20年と少ししか生きていませんが、日頃から難しいと感じる問題で

あったので、本当にその通りだと思いました。話していると、本当に少しの違いで受け取られ方が変わります。例えば、相手から言葉をかけられる際、自分が相手に少しでも誤解を招かないように意識して話している語尾、があったとすると、それを相手から受けたときは場合によっては腹が立つ場合もあります。

自分が思っていることを言葉を巧みに使って100% 伝え切るのは、時に難しいです。しかし、教師は、言葉を巧みに使いこなせなければならないと思います。言葉は刃物です。使い方によっては美味しくも、凶器にもなります。沢山本を読み、人と話し、少しでも誤解を招かない、言葉にパワーのある教師になりたいです。

自分の制作の意図を表現する、そのために編集をする。実は授業づくりも同じである。授業づくりのレッスンになっていると思われる。

6 / 8 Ver.2 版を見て考える

3 回生ゼミ。遠隔授業での動画制作。ver.2 が95%完成した。

この後、微調整をして公開となります。

そして、これからの展開についても説明⁽¹⁴⁾。いい作品が完成したら、大学の HP に載せてもらえるように私が交渉するうということ。学生たち大喜びであった。意図したわけではないが、これが最後の丁寧な仕上げをするためのモチベーションにつながったと考えられる。

仕上げ。

「神は細部に宿る」という言葉もある通り、最後に手を抜くと、クオリティが一気に下がってしまうので慎重に確認をした。

その中から 1 つ紹介。

5 歳児さんに you tube の見方を教える動画。

<https://www.youtube.com/watch?v=B6MeBadct2g&feature=youtu.be>

ナレーションが入ったことで、前回よりもぐっと良くなった。



私が学生に示した基本的なチェックポイントは 5 つ。

1. ナンバリングができている
2. ラベリングができている

3. 著作権の侵害にはなっていない
4. 出典が明記されている
5. 言葉遣いが適切である

この5つをチェックリストを元に、一本ずつ動画を確認していく。

「ひとりでなく」というテロップで、「ひとりで」という文字が大きい。これだと、ひとりで見ることを推奨しているように感じないか？ また、お父さんお母さんと見てというと、お父さんお母さんがいない子供はどうするのだろうか？ 出典の書き方が不十分。作者は誰で、肩書きは何で、いつ見たのかの記述も欲しいし、リンクを貼ったところで動画ではクリックできないから QR コードの方がいいのではないかなどなど議論。

実に楽しい。実に生産的。こういうのがゼミだよなあと思う。

遠隔でもできるんだなあと思う。

もちろん、学生たちがすごくやっているからなのだが、と思う。

つい、うっかり話してしまった。

「このキャラクターは、オリジナルでしょ。これのグッズを作ったら？」

「え？」

「だから、このキャラクターに名前をつけて、5歳児さんの生活を支える用品にこれを使うのさ。例えば、タオルに印刷するとか、マスクにするとか」

「え？」

「いや、だってスマホがあるでしょ。パソコンがあるでしょ。簡単でしょ」

「はい」

「それは販売しようよ」

「え？」

「だって、ノーリスクでしょ」

「あ、まあ、そうです」

「じゃあ、やったらいいのに」

と。

これからの時代、教師は教師であり続けることはできるのだろうか。人工知能が教師の仕事を支えてくれることもあるが、奪い取っていくこともあるだろう。また、公務員である教師が公務員で無くなることも考えられる。

教育はなんだか聖域扱いされていて、教育をビジネスにするというのは嫌がられる傾向にある。しかし、私は違う。社会の評価を受けてみよと思うのだ。社会のニーズを掘り起こし、または、

発見し、自分が学んだことや手にしているスキルを活用して、やってみるがよいと思う。素材はダイソーにたくさんある。コストもほとんどかからない。

ノーリスク、ノーコストといってもいい。

あとは挑戦するだけだ。

「まだあるな。ここまで絵が描けるのだから、この絵で間違い探しを作ったらいいと思う。子供達喜ぶよ」

「画像で作ってもいいし、動画で作ってもいい」

「さらに、この動画を英語バージョンにしてしまうというのもありだなあ」

「そしたら、世界デビューできるじゃないか。世界の子どもたちに伝えられると思うよ」

と。

日本語バージョンで丁寧に作っておけば、あとは言葉を変えるだけ。英語の勉強にもなる。本学のネイティブの英語の先生にも相談すれば面白くなるだろう。

こういうことを5本の動画についてあれこれあれこれ話した。

この実践を始める時、

(人様にお見せすることがギリギリ許される動画は作りたいねえ)

と思っていたけれども、学生たちに失礼だったなあと思う。

これ、なかなかいい。

あとは、大学に確認してもらって、オッケーなら大学のHPに掲載してもらいたいなあ。

そして、このあとは、保護者バージョンを作り、メイキングの文章をまとめて、第一ステージは完了。海外バージョンの第二ステージは、後期かなあ。

学生たちの成長から幸せを得られるなんて、実に嬉しいことだ。

学生の感想から

私たちのグループは、前回提出した動画からBGMの音量を下げ、声を聞き取りやすくしたり、ナンバリングをしたり、話の内容にあった動くスタンプを付けたりした。動画を作成するにあたって、使用したアプリなどには何も課金していないにも関わらず、iPhoneでもここまでこだわった動画が作れるのだなということを知ることができた。

また、今回の授業で、グッズの作成やワールドワイド版の作成のお話をして頂いた。私は元々美術が得意で、絵を描いたり、それに基づいたアイデアを出したりするのが好きだが、どこかに生かせるなんて考えもしなかった。グッズの作成なんて無限にアイデアが挙げられるにも関わらず、動画を作る前もそうだったように、私には無関係の難しいことである

と感じてしまっている。

単位習得のためではなく、自分の人生経験の一環として、時間があれば是非挑戦してみたいと思う。

ICTを活用することで、新しい世界が広がり始めているのがわかる。

別の学生の感想から

今回のゼミでは「指示は肯定表現を使うべき」という言葉が印象に残った。池田先生が例に挙げた野村監督の指示には、まず「高めを打つな」という否定表現を用いたものが使われ、次に「低めを狙え」という肯定表現のものが使われた。

前者の否定的な指示では、「高め」という言葉に強調が入ってしまうため、指示を受けた選手は監督の思いに反した動きをしてしまう結果となった。後に後者の肯定的な指示を受けた際は、「低め」という言葉に意識が向き、監督の思いは適切に伝わることとなった。

私は、体操教室で子どもたちに指導をしているのだが、以前似たような経験をした。跳び箱を飛ぶ際に上半身が下がると、頭から落下しかねない。そこで「頭下げるなよ」と声掛けをしたところ、子どもはかえって頭を下げてしまったのである。危険を感じ「上げろ！頭」と指示を改めたところ、その子供は安全に跳び箱を飛ぶことが出来た。

強調したいことは指示の「最初」に言うこと。否定表現を用いた遠回しな声掛けはしないこと。この二点が指示をするにあたり必要な技能なのだと気づいた。

児童に対する指示のあり方について、動画作成から学んでいることがわかる。

6/15 完成版を確認する

本日、小学生版：快適で適切な遠隔授業の受け方の動画3本、幼児版：快適で適切なYouTubeの見方の動画2本の提出があり、そのうちの4本を完成版として確定しました。残りの一本は、最後の細かい修正を指示して、明日には完成したものが私に届く事になりました。

最後の一本の修正の内容の一つ目は、「遠隔授業を受けるときはビデオをオンにして受けてね」「お父さんお母さんと一緒に見てね」という言葉について、こだわった。確かに、授業を

する側からすると、児童生徒学生の顔が見られるのは授業をやりやすい。しかし、一方で受ける側からすると、自分の顔が画面にドーンと出てくるのにプレッシャーを感じる場合もある。

また、電波の状態が悪かったり、カメラが壊れていたり、元からカメラがなかったりすると、ビデオをオンにしようがなくなる。子供達は、こういうとき妙に正義派になってしまって、ビデオをオンにしない子供を攻撃することがある。これを避ける必要がある。そこで、必ずオンにしろということではなく、もう少し柔らかい言い方でオンを推奨するような言い方に変えることはできないかとした。

二つ目は、出典の表記。自分たちの思いつきではなく、調べたサイトを出典として動画の最後に表示しようという事にした。学生たちは先週はそのサイトの名前と、URL のリンクを提示していた。しかし、これでは検索がしにくい。せっかくなので、URL を QR コードにしたものを添付する事にした。これならば、動画を止めてスマホで簡単にそのサイトにたどり着ける。

それをしてきたのだが、その貼り付けた QR コードが、微妙に傾いている。曲がっているのだ。これはまずい。その僅かの傾きで、それまでに制作したすべてのものが台無しになる。ほんの少しなのだが。ほんの少しだから見逃して、5本の動画すべて同時に完成としたほうがいいのかもと思った。

しかし、やはりこれは認められない。

説明をしたところ、学生も理解を示したので、修正しようとなった。

明日には修正したもののリンクが届く。

本当に細かいところなので、スルーすればできる。

しかし、それは学生たちにいいことではない。

ものを作るというのは、そういうものではない。

まして、自分の名前を表に出して、全世界に公開するものだ。

ここで私が嫌われたとしても、踏ん張ることは、彼らが卒業論文を書く時に大きな意味を持つとも思う。細部まで気を使って文章を仕上げていく時、

(あ、あの動画の修正のことと同じだ)

と思い出してくれるだろう。それを願う。

この動画は、本学の HP にリンクされて、公開される運びとなった。

せっかく丁寧に作ったものなので、事務方に確認をしてみたところ、是非という言葉をもらったのでそうする事にした。

大学の教員になって15年になるが、遠隔授業をするのは初めて。そして、学生たちに動画を作らせて、それを大学の公式 HP 上で発表するのも初めて。いやあ、初めてが多い(^^)。

こうなりゃ、この先、もう少し暴走してみよう。

ゼミ生たちと、その企画についてゼミの後半は話し合った。電子書籍を出せるようになろうというものだ。これは、来週から動きます。

ゼミ生たちのおかげで、やりたい事、やってあげたい事が次から次へと生まれてくるので、一休みをする暇もありません。いい事だと思う(^^)。

学生の感想から

今回の授業では、今までのオンライン授業の受け方の動画の最終確認、そして【電子ブック作家デビューの仕方】についてでした。YouTuber デビューの次は電子書籍デビューか！ととても驚きました。

中でも、印象的だったのは【自己プロデュースしよう】という言葉です。YouTube や電子書籍デビューとどういった関係があるのか、ということを考えました。

まず、自己プロデュースとは自分の魅力を戦略的にアピールすることです。大学生になって高校生までとは比にならないくらいの多くの人との関わりがあり、将来が少しハッキリしてきて、自分がどういう人間になりたいのか、人間としての「理想像」というものがはっきりとしてきました。自己プロデュースとは、この「理想像」に近づく過程を含む自分自身をアピールしていく事、という風に認識しています。

YouTuber になる、電子書籍作家になる、これらは自分を世に出す行為です。世に出す事で、より多くの人の目に触れる分、様々な意見が聞け、周りにどういう風に見えるのか、自分を客観視できるようになると思います。実行していく中で「理想像に近づいた」と感じるのは自分ですが、それには周りの意見も欠かせません。そのため、自分を発信する事は成長していく上で大切だと感じました。つまり、自分を発信する手段である YouTuber、電子書籍であると考えました。

別の学生の感想から

コロナのおかげでできる授業もある。

今回までの授業を通して思った。コロナウイルスは世界中に大きな影響を与えた。それは

良い意味でも悪い意味でも。

当然私たち大学生にも影響は大きい。学校にはいけない、十分にお金も稼げない、友達とも会えない、思うように時間が使えない。

しかし、コロナウイルスのおかげで気付けたこともたくさんある。

例えば、他人との距離。ソーシャルディスタンスとは上手く言ったものだが、これはコロナが蔓延したからできた言葉じゃない、と私は考える。人と人との距離は、図らずしも社会で生きていく中で自然に身につけていったもの。それが可視化されて言葉になっただけで、もともと根底には同じようなものがあった。コロナのせいで生み出されたものではない。コロナのおかげで、分かるようになったのだ。

SNSが発達した現代で、映像や遠隔での授業を取り入れてきた学校は少なからずある。それが「異例だ」と言われてきたのは、前例があまりに少なかったからである。しかし、今のこのご時世でそれは無視できない。遠隔授業をすることに対して積極的に取り組まなければならない、そういう時代にコロナのおかげで変化しているのだと思う。

私たちは今回までの授業の中で YouTuber になった。そして、次は電子ブック作家になろうとしている。池田先生は、私たちに色々な道を用意してくれている。とても有り難いことだ。それをどう使うかは自分次第、といったところだろう。私は今、とてもわくわくしている。どうにかして、教育の現場で最前線に戦える武器を持つ手でいたい。

間違い探し

第3期で行なった電子書籍作りと間違い探しづくりも、授業の記録から端的に記す。

電子書籍販売である。これは私がやっている note の方法を教えた。

<https://note.com/ikedaosamu/n/n0996bba9baaa>

やり方を教えて、一週間後には、全員 note で自分のページを用意し、そこに有料販売の装置を作っておくことを指示した。売れなくても良い、いや売れないだろう。しかし、売るためのプラットフォームを持っていることが大事。

ゼミ開始の時に確認したら全員できていた。いや、実に簡単なのだが、youtube で成功したことが彼らの自信になっている顔つきであった。

新しいフェーズはまず、間違い探しを作ってみることをさせた。

幼児教育ではよく使われる。また、学生たちも小さい時には『旅の絵本』『ウォーリーをさがせ』『ミッケ!』などで遊んでいる。

以前もこれで ICT 活用の学習をさせようと考えたことがあったが、最大の問題は著作権で



3つのまちがいがあります☹



図3 間違い探し1

まちがえはぜんぶで5つあるよ！



図4 間違い探し2

あった。

しかし、今回はキャラクターは自分たちで開発している。もう、最大の問題はクリアできている。となれば、やるしかない。

先週のゼミの最後に、

「じゃあ、今のキャラクターを使って間違い探しを作ってきてください」

と指示。

今回も、何のアプリを使ってやれとかどのように作れとかは一切指示はしていない。

「動画を見た子供が、もっとないの？と言ってくれているので、そんな子供たちが楽しめるような作品を作ってください」

というだけ。

それでできてきた間違い探しのβ版が写真のもの。(図3)(図4)

ここからさらに学びを深めていかせたい。幼児、児童が色を認識する、形を認識するというのはどういうことなのか。また、これに関わって何か特別に配慮することはないのか。おそろく色弱などはさほど理解していない学生は多いだろう。

間違い探しは、脳科学なのか心理学なのか、まだまだ私も勉強不足でわからないことが多い。ただ、日本デジタル教科書学会発表で間違い探しを活用した読解の発表をしたが⁽¹⁵⁾、この実践をやった時の感覚では、やはりここはとても可能性があると感じている。

また、学生たちと一緒に新しいところに足を踏み出していけるのは、実に嬉しく楽しいことだ。

「前期は私が君たちを YouTuber にしたり、電子書籍作家にしました。私がプロデューサーでした。後期は、君たちが私を何かでプロデュースしてね。私、セスナを操縦したりとか色々なことをしているので、ちょっとやさそとじゃ「あ、それもやったことある」となるし、やれたとしてもそれだけでなく、私にも成功体験を与えて欲しいですから、そこいらあたりを考えておいてね(^^)。」

と恐ろしい指示も出しておく。

どうなるのかなあ(^^)。

考 察

デジタル、ICT の活用、EdTech は教育の世界を大きく変えようと、随分前から言われている。Society 5.0 に向けて、変わらなければならないと言われている。

「Society 5.0 は、人工知能(AI)、ビッグデータ、Internet of Things (IoT)、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられ、社会の在り方そのものが「非連続的」と言えるほど劇的に変わることを示唆するものであり、第5期科学技術基本計画(平成 28年 1 月22日閣議決定)で提唱された社会の姿である。」⁽¹⁶⁾

しかし、教育は慣性の強いものである。去年と同じであれば問題ないとなることが多い。そこに、新型コロナウイルスによる強制的な授業スタイルの変更が起きた。遠隔授業である。

『社会の在り方そのものが「非連続的」』である。突然違う世界に連れていかれた。本当にそうであった。これをピンチとするか、条件の変更と捉えるかである。私は後者とした。そして、その時に生まれてくる課題を解決する学びとは何かを考えて、学生たちとやってきた。

危機管理は私が担当し、目的と目標を与えて内容と方法は自分たちで考えさせた。ある意味小論文のようなものだ。やがて彼らは、自分で目的と目標を設定し、危機管理もしやっていく。これは論文のようなものだ。

従来三回生ゼミでは、小論文を書かせるのではなく、ものづくりを通して、この小論文のような体験をさせることをさせてきた。例年は、漢字の学習材を開発することでやってきた。しかし、今年はこの動画作成に切り替えた。彼らは遠隔授業を受ける一期生として、子供向けの遠隔授業の受け方を説明する動画を作った学生としては、最初になるのではないと思われる。それは彼らの自信につながるのではないと思われる。

日頃の学生たちの様子を見ていて感じることは、学生たちは、自分自身で自分に蓋をしてしまっているというものである。または、檻を作っておりの中にいるというものである。自分の限界を自分で勝手に決めて、そこから出てこない。自分にはできない、自分には関係のないことだというスタンスでいる。これをなんとかしたいと思っていた。

そこで、動画作りは、かなり自由にさせて挑戦させた。指示は、目的、目標、してはいけないことを示しただけである。どのアプリを使うと良いということは基本的に指示しなかった。目的に応じて自分たちが使いやすいものを探させた。しかし、フィードバックは丁寧に行った。β版を作って、バージョンアップしていく。一回で完成するものではないことを丁寧に伝えた。

新しいことは、全て分かるまでやらないという人がある。しかし私はその立場に立たなかった。トランプの遊びと同じで、誰かがやってるのを見て何となく理解して、一緒に遊びながら教えてもらって、ルールを覚える。それで、自分でできるようになる。そして、他の人に教えながらさらに理解する。とにかく始める。そして、やりながら覚えるとした。社会の変化が不連続でしかも早く変わる時代には、アジャイルな対応が必要になる。これは、今後の卒業論文指導にも、卒業後の働き方にも大いに関連すると思われる。

今後の課題としては、前期は教師が学生たちを新しい世界に導いたが、学生が教師を新しい世界に主体的に導くというゼミの運営も考えてみたい。

注

- (1) 池田修「教材から学習材へ—深い学びを見据えて—」(『学校教育』広島大学附属小学校 学校教育研究会 第1220号 2019.4)
- (2) "Application of See One, Do One, Teach One Concept in Surgical Training" Sandra V. Kotsis, MPH 1 and Kevin C. Chung, MD, MS 2 "Plastic and Reconstructive Surgery" 2013.5
- (3) たはいや、漢字ウォーリーを探せ、人生名言集、句会などの実践は、池田修『スペシャリスト直伝！中学校国語科授業成功の極意』(明治図書 2017.3)に詳しい。
- (4) WITHNEWS 2016/08/16 「急がば回れ」は本当か？ 語源の舞台・琵琶湖で実験してみた
<https://withnews.jp/article/f0160816003qq0000000000000000W03j10601qq000013857A> 2020.8.24 閲覧

- (5) 豊福晋平「調査回を追うごとに取り残される日本」
https://gakko.site/wp/archives/1724?fbclid=IwAR3ERgs_SIj3EhYbWdK2Tzs-4hh9wTqxUDaXnhARnZDU2ZJ9h7QrZWO1UP0 2020.8.24 閲覧
- (6) 文部科学省「GIGA スクール 構想の実現へ」
https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf 2020.8.24 閲覧
- (7) 『授業づくりの発想』（藤岡信勝1989年、日本書籍）
- (8) 文部省の「遠隔教育システム活用ガイドブック」では、合同授業型、教師支援型、教科・科目充実型など10種類の遠隔教育に分類されている。「遠隔教育システム活用ガイドブック」（文部科学省 平成30年度 遠隔教育システム導入実証研究事業）
https://www.mext.go.jp/content/1404424_1_1.pdf
- (9) 「学生の授業環境確保で、通信各社が支援策。50GB 上限で無償化」Impress watch 2020.4.3
<https://www.watch.impress.co.jp/docs/news/1245003.html> 2020.8.23 閲覧
- (10) 池田修『zoom で始める遠隔(オンライン)授業』(note 2020.4.27)
<https://note.com/ikedaosamu/n/n0996bba9bbaa> 2020.8.24 閲覧
- (11) リンク先は、限定公開になっています。シェアはご遠慮ください。以下同じ。
- (12) この保護者編は、時間切れのために作ることはできなかった。
- (13) 3, 4 年生向けのものは、削除済みである。
- (14) 翌日の6/9に企画広報課に連絡をして、掲載の方向で動き出してもらった。
- (15) 池田修「電子テキストで間違い探しを作って学ぶ読解～「ごんぎつね」二の場面を使って～」
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsdtp/6/0/6_87/_article/-char/ja/
(日本デジタル教科書学会 2017口頭発表)
- (16) (文部科学省「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」平成30年6月5日 Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース」)
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/06/1405844_002.pdf